

「自分で護った小さな^{いのち}生命」

山本 一恵

今年には戦後60年、広島、長崎原爆から60年と、メディアを中心としてさかんに取り上げられている。

50年でなく、どうして60年なのか？よく考えてみると、戦争体験者の全員が今年で老齢域に入ったのだということに気が付いた。あの悲惨な負け戦を直接言葉で語るができるのは、私たちしかない。聞き伝えては物語になってしまう。当時、全国民がそれぞれに戦争を体験した。たとえ子どもであっても逃れることはできなかった。

私が生まれ育ったのは甲子園、当時は兵庫県武庫郡鳴尾村と言い、全国で唯一の村立中学校（現、県立鳴尾高校）を有する裕福な村だった。甲子園球場をはじめ鳴尾競馬場、海水プールも備えた阪神パーク、甲子園ホテル（現、武庫川女子大学キャンパス）などの施設、苺摘みや芋掘り、潮干狩りや地引き網漁、海水浴や蛸狩りなどの楽しみ、電車も夏は透かしの車体と籐椅子に模様替えという風雅に恵まれた平和な田園地帯であった。

ところがその付近に川西航空機という工場があり、電車沿いの林の中にも航空機を配置するなど、大空襲の標的となる条件も備えていた。このために終戦間際になって、「火垂るの墓」に描かれているような悲惨な大空襲を受けることになった。その前触れであろうか、艦載機が頻繁に飛来して来ていた。

昭和20年の夏、私は国民学校4年生だった。ほとんどの生徒は集団疎開か縁故疎開に行っていて、学校にはほんの少しの生徒しか残っていなかった。授業もほとんどなく、毎日、松の木運びや、馬糞拾い、兵舎（校舎の半分が兵舎になっていた）の掃除などをしていた。それでも一応勉強道具をランドセルに詰めて登校していた。

その日も警報が鳴り、それぞれ家の方向別にまとまって急いで下校した。途中、私はつまずいて転んだ。その拍子にランドセルの中身が勢いよく道に飛び出した。慌ててそれらを拾い集めたが、みんなはずっと先を走っていて、やがて見えなくなった。私は自分の息遣いを聞きながらひとり走っていた。やけに道が白かったのを覚えている。と、その時、目の前の道を黒い影が横切った。鳥？殺気を感じた瞬間、さっと旋回して戻ってきた艦載機からバリバリバリッ。私は訳も分からず物陰に逃げ回った。あたかも殺虫剤の噴射から逃げ惑うゴキブリのように。咄嗟に動物的感覚で、すぐ前の家の門前に架かっている石橋の下に潜り込んだ。その間も艦載機からの銃撃は続いた。付近の窓ガラスや屋根瓦が砕け散る音を、案外冷静に聞いていたような気がする。

どうやら敵機が去ったらしく、付近の人達が被害状況を見届けるために出てきて、私を見つけた。足首が橋から出ているのに無傷だったのは、私の運が強かったのか？敵が下手だったのか？ようやく安心して橋から出ようとしたが、腰が抜けて動けなかった。

やがて警防団のおじさんに背負わされて帰ってきた私を見た母は「艦載機の機銃掃射があった

のに、今まで何処をふらついていたの？すごく心配したのに」とえらい剣幕。おじさんから説明を聞いて、今度は息苦しいほどきつく抱きしめられた。途端に力が抜けて大声で泣きじゃくった。いつまでもいつまでもそうしていた。

その後、8月5日の夜に大空襲を受け、家は跡形もなく焼け落ち、豪の中で母は火傷を折った。そして、その十日のちの終戦を迎えた。